

故本多謙三君の業績

吹田順助

昭和十三年三月七日、元東京商科大学豫科教授本多謙三君は宿痾の爲に竟に長逝せられた。享年四十一。その生涯は長くはない。併し、その學界に遺された業績が質に於て量に於て決して乏しくなかつたことは、せめてもの慰めである。茲に君を偲ぶよすがとして、主な勞作を擇んでその内容を紹介することとする。

自分が君の名を最初に知つたのは「貨幣理論の現象學的考察」(大正十二年「思想」七月號及九月號)の筆者としてであつた。この意味でこの論文は自分にとつて感慨深いものであるが、學界に於けるひとつの貢獻としても最も注意すべきものに屬する。この論文を機縁として、實に君はその學生時代に、恩師左右田博士の推輓によつて學界にデビューされたのであるが、茲にはひ弱冠の學生の天才的な頭腦の閃きを看取することは難くないであらう。これに加ふるにこの論文は邦文の文獻としては現象學の問題を取り上げた最初のものゝひとつであり、殊にこの立場から貨幣理論を論じた唯一のものである。君は故土田杏村氏によつて現象學に對する關心を植ゑつけられたのであるが、茲では所謂現象學的な本質記述の方法を「批判主義精神の純なる發展」として論じてゐるのであり、この意味に於いては左右田博士の貨幣理論の新たな發展の一方を示唆してゐるものと云へる。この目的から、君はヒュームの哲學の現

象學的解釋から發足し、この哲學を云はゞひとつの「領域」に適用したものととしての貨幣理論を分析してゐるのである。元來、現象學の方法は「下から」の建前を飽くまで捨てず、即ち形而上學的獨斷を避けながら、しかも直觀と體驗との雜多に迷はない態度をとる點、「事柄自ら」の示す所を偏見なく受取つて、その本質を見きはめる點に存するのであり、その本來の對象はかゝる本質としてのエイドスである。従つてこの立場においてみれば、ヒュームの貨幣理論もまた貨幣といふ「領域」に於いての eidetische Ontologie でなければならぬ。かくて貨幣は經濟財の理念、即ちエイドスとして、經濟價值といふ「意味」を指示するものであり、この限りに於いてヒュームの云ふ如く「商業の當體ではない」のである。之を要するにこの論文は異なる過程をとつて左右田博士の所説を裏づけたものである。この論文の續篇と見る可き「貨幣に於ける社會性と歴史性」(大正十四年「思想」七月號)は前の論文によつて確められた貨幣概念の先驗性が、單純に範疇的・形式的な先驗性ではないことを論じて、貨幣の本質を普遍的・具體的な社會性乃至歴史性の中に見ようとするものである。この論文は貨幣理論に關聯して「領域」と「範疇」との區別を強調したものであるが、この點は後の「形式化と普遍化」(大正十五年九月「哲學研究」二二六號)に於いて再び詳論されてゐる。この外、この論文は、これ以後の述作の主題を暗示してゐる點が少くない。殊に論中にはフッセアルの純粹現象學が意識のノエシスの側面に就ての省察を缺く點を指摘して、貨幣に於ける「自我」の發現の態を分析することによつて、かかる省察に資する可きことを述べてゐるが、のちに學界に與へたる反響の點において最も重要な論文であるところの「表現としての身體と實存としての身體」は、かゝる省察の成果と云ふ可きである。これに就いては後に論及するとする。

經濟哲學に關する述作では上述の二論文が主なるものであるが、この外には「歴史的・社會的學問、特に經濟學の**法論に就いて**」(昭和二年「思想」十月號)がある。この一文は認識の先驗的形式と研究の指導觀念との區別を説き、指導觀念としての方法論的形式を以て、經濟科學者の體認する規則として現實的に科學者の意識に交渉するものであるとし、この意味に於いて、方法論を以て經濟科學の範圍で現象學的立場を守るものと解する、更にこの點より、マックス・ヴェーバーが歴史的學問に特有な方法論的概念として考案した「理想型」を分析してゐるのであるが、結局、かかる「理想型」を構成する指標を知る爲には、その經驗的立場は先驗的立場に移らねばならないことを述べてゐる。これらの經濟哲學の論文は岩波書店より上梓する豫定であつたところの「經濟哲學」の主要な内容をなすものであつたらうと思はれ、晩年、この方面の書物を大分讀んで居られた様であつたが、遂に未完成の儘終つたのは、君に取つても學界に取つても一つの恨事と言はねばならない。

君の純粹の哲學の論文として發表されたものは前述の「形式化と普遍化」が最初のものであるが、この中に附言してゐる非人稱判斷の論理的性質を再検討したのが「**非人稱判斷に就いて**」(昭和二年「思想」一月號)である。君は大正十五年に母校の豫科講師として初めて論理學を講ぜられたのであるが、その時の講義の内容は、主としてシグヴァルトの「論理學」の批判であつた、と聞いてゐる。而して、シグヴァルトは非人稱判斷に着眼してモノグラフィイを發表した學者として先づ第一に想起される人であるが、君の非人稱判斷論はシグヴァルトの取り上げた問題を全く他の見地から解釋したものであり、これをプレントナーの存在判斷と關聯して考へてゐる。筆者は存在判斷を以て「事柄そのもの」の自己確立であり、質の差を伴ふ判斷よりは一層原始的なものであると述べ、プレントナーが存在判斷の

特質を示すものとした内部知覺をフツセアルの本質諦觀の意味において解釋し、延いてかゝる意味に於ける存在判斷の具體的統一が示すところの「事柄そのものの自己確立」としての特質は、むしろ非人稱判斷の「性質的統一」に於いて一層具體的・直接的に現はれることを指摘したのである。この見解は後に「**主部の論理と客部の論理**」(昭和十一年十二月、東京商大六十周年記念論文集)に於いて形式論理的に發展され、この立場よりして傳統的判斷式等の吟味が行はれてゐる。これらの論文は君の論理學的研究の一斑を示すものであるが、その論理學上の所見の大綱を説いたものとしては「**論理學初步**」(昭和五年五月)と「**論理學通説**」(昭和十二年十一月)がある。前者は講義用として假に印刷されたものであつて公刊されたものではないが故に、茲では立ち入らないこととする。後者は最近に理想社の「**新哲學講座**」の一部としてもされたものであり、君の絶筆である。(この講座の抜刷が自分の許へ贈られた時には、君は既に一切の筆を絶つて鎌倉に病を養つて居られたのである。)この論説の内容は簡略に諸家の見解を批判し、自家の立場を明かにしたものであり、言語による意義の開明を主とする「言表の論理」、思考を以て存在そのものゝ分有となす「分有の論理」、存在を以て思考の自己發展と考へる「**辨證法の論理**」、判斷の妥當性を明證性と關聯せしめる「**現象學的論理**」、これらの存在の論理に對して存在と思考との異縁を前提する「**方法の論理**」を説き、最後に固有の立場たる「**行爲の論理**」を主張するものである。この行爲の論理はこれより前に「**表現としての身體と實存としての身體**」に於いて實存辨證法として説かれたものであり、かゝる主張の前提として、特にヘーゲルの辨證法等の批判は「**現象學と辨證法**」及び「**具體的思考と抽象的思考**」に於て行はれてゐる。

先づ「**現象學と辨證法**」(昭和四年「思想」十月號)はハイデッガーの所説の吟味から始まる。すべての立場的なもの

の排除に出發する現象學が最後の絶對的領域として衝き當つたものは體驗の流の「場」としての時間であり、この意味に於いてハイデッカーは存在の時間性を説くものである、しかし、かゝる時間は謂はゆる Geworfenheit としての現在性であると同時に、かゝる現在性を推し開き脱れ出る可能性を示すものであり、而もこれによつて現在性が否定されると共に、存在は自己の本來の姿に還るのである。それ故に、否定の力を生命とする辨證法はむしろ吾々の存在に由來す可きものであり、思考の優越を説くヘーゲルの辯證法はキェルケゴールの謂はゆる Existenz-Dialektik に對して抽象的なものに過ぎない。この點で辨證法の現象學的解明の必要が説かれると共に、現象學に於ける志向性の思想が検討され、志向の足場は身體であると論斷される。併しこれを以て直ちに唯物辯證法と現象學とを結び付けようとするマルクーゼの所説に對しては、犀利な論難が加へられてゐるのである。この様な所説は最近の「具體的思考と抽象的思考」(昭和十二年「思想」二月號及三月號)に於いては、更にモーリス・ブロンデル・西田博士等の説を援用して詳述されてゐる。先づ判斷知と考へられた思考は存在に執着する知覺を否定する點で思考そのものゝ能動性の現はれではあるが、それは自ら否定し分別したものを再び集結することが出来ない。この様な云はゞ彷彿的な思考は自律的ではあつても未だ具體的なものとは云へない。これに對してブロンデルの説く直覺知は再びかゝる判斷知を否定する、否定の否定である。それは思考がその自律性を否定して思考ならぬものに席を譲り自らを委ねることによつて自らを全うする知識である。かゝる否定の否定は實在界への飛躍を前提とするものであるが、ブロンデルに於いては未だかかる直覺の基底はつきとめられてゐない。これに對し、ヘーゲルの辨證知は否定の否定を意味するものではあるが、此の二重否定は思考そのものゝ否定として思考以上の立場に出づるのではなく、何處までも思考の發展として考へら

れてゐる。それ故に、否定性を單に直覺するに止らず、しかも、これを精神又は理念として實體化しようとしなければ、西田博士の謂はゆる「無」の立場即ち有を含み有を生む無の立場が認められねばならない。この立場は既に自己を絶對的に否定し、而して自己のノエシスの内容を限定することが出来ない時にはただ行爲によつて自己の見極め得なかつたものを現出し創造する立場である。かゝる飛躍をケルケゴールはイロニーの實踐的意味として示してゐるのである。而して筆者はかゝる「無」の底にして「無」を脱する機關をば、能産的自然としての身體と考へるのである。この一篇は「表現としての身體と實存としての身體」より遅れて發表されたものであるが、實は後者の所論へ直接續くものである。

「表現としての身體と實存としての身體」(昭和十年「思想」五月號及六月號)は先づ表現としての身體(視覺・聽覺)を意味する言語の分析から論を進める。元來、ある物が物によつて表示されるには、その兩者の間に共通者がなければならぬ。而して一方はこれを隠蔽する要素を含み、他はこれを暴露する働きを有するのである。この點で言語は「詩的性格」を持つてゐる。しかしこの意味に於ける表現によつて生み出される對象の本質的な形態は、すべての美的表現の場合の様に有機的自然に外ならない。身體はかゝる表現と解される限りはそれは、單なる體軀である。然るに身體が行爲によつて生み出すものは單なる有機的自然ではなくして、その奥にある實在であり、眞實である。而も、それは吾々が認識し組織するところの眞理ではなくして、吾々を包み、吾々を驅り立てるところの、生産的な實在でなければならぬ。それはスピノーザの謂はゆる能産的自然である。それは生命に特有な衝動・本能によつて彷彿せしめられるものであり、理性ではなくして、むしろ物性である、それは如何なる知的作用を以てしても覺知されない

ものである。此の意味で體軀は身體の働きの場所ではあるが、有機體として原始的作用を限定したものである。吾々は體軀を通じて身體を持つ他面に、體軀によつて實存を毀損し、却つて滅びに於いてそれを實現すると云ふ矛盾にさらされてゐる。吾の體軀は體軀として限られてゐるが、それは原始的作用を本質としてゐるのである。かくて筆者は自己の立場を原始的な實存辨證法と呼んでゐるのである。

* * *

茲に取り上げられた勞作は、君が「思想」「理想」「新興科學」「改造」「中央公論」「商學研究」「哲學研究」「日本評論」「岩波講座」又は諸新聞に發表されたその全勞作の中の十分の一にも足りない。かゝる多くの述作が僅か十五年足らずの學的生涯の間に、しかも病苦の絶えざる苛責の裡にあつて産み出され、加之、その多くのものが獨創的な着眼と周密な論構を伴つてゐるのを見る時は、その非凡な天賦と熾烈な攻學心に對し唯頭をたれるのみである。しかし、これらの述作の中には單に問題の提出に止まつてゐるものも少くなく、全體として考へても、やがて完結される可き體系の基礎工事であると云ふ感が深い。かゝる周到な基礎工事の上にやがて打ち樹てられる可き大廈の姿を想像する時、君の早逝は惜みてもなほ餘りある。況して幾多の未完成の構想を胸に抱きながら苛酷な運命に直面したその人の心事を思ひしのべば、ただ暗然たる氣持にとざされるのみである。思へば最期の日の前日に君を病床に見舞つた際、言葉もなく落涙されたその姿は今でも眼底にこびりついてゐる。感慨萬斛である。吾々としては、今は、君の勞作を何等かの形ちにおいて纏めて、それを上梓すべき責務を痛感することを附記して、この小論を閉ぢることとした。

一 橋論叢 第一卷 第五號

附記 この小論を書くに際して、自分には十分の準備と餘裕とがなかつた爲に、故人の勞作の配列・検討において故人の門弟であり、親友であつた江澤讓爾君の盡力を煩はしたことが多い。この小論の過半は君の力に歸せらる可きである。記して感謝の意を表することとしたい。

本號執筆者紹介

上田辰之助氏 東京商科大学教授 經濟學博士
 田中誠二氏 東京商科大学教授
 村上秀三郎氏 辯護士 計理士
 加藤由作氏 東京商科大学教授 商學博士
 増田四郎氏 東京商科大学専門部講師
 米谷隆三氏 東京商科大学教授
 吉永榮助氏 東京商科大学豫科及専門部講師
 久武雅夫氏 東京商科大学豫科講師
 板垣與一氏 東京商科大学豫科及専門部講師
 吹田順助氏 東京商科大学教授